

# 第四十九回 静岡県そろばんの日

中遠地区 尾崎 潔



受付開始の合図で、会場に人が入ってくる。そこからは人の流れが様々になる。先生方を中心にいるいろいろな所で円が出来あがっている。いろいろな言葉が飛び交っている。

父兄が多い。そして父兄は、小さな子供たちを連れてきている。受賞者たちの弟妹たち。未来の受賞者たちである。そろばんの「つながり」がある。

十二時半、予定通り式典が始まり、会長式辞、来賓祝辞と進行していく。そして生徒表彰。今日、自分はここで生徒を誘導する係の一人だ。前半は生徒を壇上に送り出す役目。ハプニングあり、すぐにそれを回収する奇跡的なサポートありで、目まぐるしく展開。後半は生徒を出口に送り届ける役目。表彰から帰ってくる生徒の顔を一番に間近で見ることができる立ち位置。笑い顔、強張り顔、照れ隠し顔、おどけ顔、様々な緊張と緩和の表情に出会えた。ここに、この表情に、この日が凝縮されていた。

それから、作文、詩の発表。十段合格者の発表（小学生がいる）、全日本珠算選手権大会の報告、代表謝辞があり閉式。その後、フラッシュ暗算、お楽しみ抽選会が行われ幕となった。

この日、二つの思いが残った。一つは、



もうひとつの思いは、詩と作文の朗読。ここで読まれた言葉。「算盤・好き・努力」の単語。

七月の終わりに突然亡くなられた先生がいる。その先生の思い。それを考える。そしてここにそろばんに対する熱い子供たちの言葉がある。この言葉の中に、いろいろな人の思いも重ねられる。教える側の思いも重ねられる。

自分たちは、その思いと言葉の間にいる。「そろばん好きになる努力できる」の生徒の言葉に、様々な人の思いをのせて、「ことば」をかみしめてみようと思う。

役員の方、ご苦労様でした。お世話になった先生方、ありがとうございます。ありがとうございました。

閉式の前行われた生徒全員から保護者への「ありがとうございます」の挨拶である。起立しての五八五名の挨拶である。苦労と喜びを近くで見守っていた人、その人たちの思いを汲み取った一言。松村先生の式辞の言葉「終わりのか通過点なのか」そのどちらであろうとも、自分で自分の背中を押す言葉になる。

表彰の時、偶然、障害を持つ子と一瞬だけ、かかわりを持つことができた。ここまでくるのに、並々ならぬ努力そして支えがあつて、この日を向かえた人たちのことを思う。特別な日であることを思う。



猛暑である。八月二十二日木曜日。この日は、毎年変わらぬ本当の夏。高校野球の決勝とも重なる特別の日に、静岡県そろばんの日の式典が静岡市民文化会館で開催された。

受付開始。その少し前から会場前には長蛇の列が並ぶ。その列から少し離れて写真を撮る先生、父兄の方の姿が。一生に一度の記念撮影。カメラを持つ手にも気合いがこもる。